

# [常陸国分(僧)寺跡(石岡市)]探訪レポート

正面が現在の国分寺





## 常陸国分寺の由来

常陸国分寺は、今を距る千二百年程前、聖武天皇の御代、天平十三年(七四一年)勅を以て天下諸国六十六ヶ所に建てられたその一つであつて、上古常陸国府の所た府中(現在の石岡市)に置かれました。ひとくちに国分寺とは国分僧寺、国を併せていうのであつて、僧寺は「金光明四天王護国寺」と称し、最勝王経を講誦し、国土安泰、万民息災を祈願、尼寺は「法華減罪之寺」と称し、法華経の功德を以て未來に仏を念願したところでありませう。

俱に皇室の勅願所として、一國の財力と民力をつくして造営せられた護國場であり、僧寺尼寺併せて定任僧三十名、封戸五十戸水田二十町歩が付され十町歩に達し何れも東西南北に大門があり、南には大門の次に中門があり、その中に並び立つ幾多の堂塔伽藍は、恰も当時の熟せる仏教芸術の粹を集めた當國一の壯大華麗な極め、就中、雲を穿く七重の塔及び金堂は京都東寺にも優る建築であつたといひます。殊に當寺の経営に施入した一ヶ年の寺料、稲束六万束は全國国分寺に領し、これに依つてみるも如何に規模の宏大なるかを想像し得ます。実に奈良朝時代に於ける常陸の文化王国を開発した一大中心地でありました。

然るに、何事にも栄枯盛衰はまぬがれ難く、国分寺創立以来百年間位は、大でありましたが、平安末期より鎌倉、室町時代と地方政治の変遷と共に、さたし、織田、豊臣時代に入り天正十八年(一五九〇年)佐竹氏と大塚氏との戦いに際し、兵火に蒙り、此の輪奐の美は勿論、列聖の宸翰に至るまで悉く烏有に帰してしまいました。

現在の中門跡には、天正二年(一五七四年)完成しました「仁王門」が有り、治四十一年(一九〇八年)石岡町国分町の大火により延焼、名工春日作の金剛力士も首手、足を撤出したのみでした。次いで元禄六年(一六九三年)本堂を再建せしが、文政五年(一八二二年)焼失、末寺千寺院を移し本堂としました。しかし、これも、仁王門と同時に焼失、現在の本堂は明治四十三年(一九一〇年)筑波四面築師の一つを移し、現在の僧寺、尼寺共にその跡には中門、金堂、講堂等の礎石が荒草の間に沙りし日の豪華の世を夢見るがごとく、一千年の沈黙を続けており、その他僧坊、廻廊、食堂、経堂等これに属する建物と覚しき礎石が発見されております。

このように、往時の跡がはつきり残っているのは、全国国分寺でもめずらう、十年(一九二一年)十月文部省より史跡として指定され、戦後は昭和二十七年(一九五二年)三月文化財保護法により、「特別史跡」として指定、受け継がれています。



現在の国分寺の入口



参道











歴史の里 いしおか

国指定  
特別史跡

ひたちこくぶんじあと  
常陸国分寺跡



健康ウォーキングコース②

常陸国分寺

健康ウォーキングコース②  
常陸国分寺跡

所在地 石岡市府中五丁目一番  
特別史跡 昭和二十七年三月二十九日  
指定年月日

国分寺・国分尼寺は、天平十三年(七四一)聖武天皇の勅願により、鎮護国家を祈るため、国ごとに置かれた寺院である。

国分寺は、金光明四天王護国之寺といい、金宇金光明最勝王経一部を安置した七重塔を設け、常住の僧二〇名と、最勝王経一〇部を置いた。寺院の財政は、封戸五〇戸、水田一〇町によってまかなわれた。

常陸国分寺跡は、昭和五十二年の発掘調査により、現本堂西側に鐘楼基壇(鐘つき堂の基礎)が発見され、次いで、昭和五十六年から二次にわたる発掘調査では、各伽藍(主要建造物)の基壇の規模が明らかにされた。特に、金堂跡については、現在残されている基壇の約四倍の規模をもつことが明らかになり、大建造物を有する寺院であった。

近年の研究では、今まで判明していなかった七重塔の位置が、寺域東側に推定されている。寺域は、東西約二七〇メートル、南北約二四〇メートルの規模を持っていた。

常陸国分寺跡発掘調査で出土した遺物は、瓦が主体であるが、その中でも、創建瓦(複弁十葉蓮華文軒丸瓦)は、平城京羅城門跡で発見された軒丸瓦と同系の紋様であることが注目される。これは、国分寺建立に際し、当時の政府が瓦工の派遣などを含む、技術指導をしたことを物語っている。



常陸国分寺跡全景航空写真(南から望む)



伽藍配置図



金堂跡基壇断面(版築)



軒丸瓦

軒丸瓦(創建瓦)



軒丸瓦



平瓦

丸瓦



軒平瓦

昭和六十年一月

石岡市教育委員会  
石岡市文化財保護審議会

史蹟常陸国分寺址とある



この正面に向かう軸線上に常陸国分寺の主要伽藍が配置されていたらしい



中門阼とある



中門趾を左側面から見る



大きな石は礎石のようだ



中世の天正二年(1574年)に、この中門の位置に仁王門が建立されたが、明治41年(1908年)に起きた大火によって焼失してしまったということで、ここに残る敷石と礎石は、創建当初の中門のものではなく、この中世の仁王門のものであるという







色々な角度から見てみる





境内側から見る



さて、正面に見えるのは薬師堂



常陸国分寺弘法大師堂とある







さまざまな石造物

























薬師堂













薬師堂の後ろに金堂趾がある







標柱に金堂址とある







これらの石は金堂の礎石であるという











常陸国分寺跡発掘調査で出土した創建瓦(複弁十葉蓮華文軒丸瓦)は、平城京羅城門跡で発見された軒丸瓦と同系の紋様であるらしく、これは、国分寺建立に際し、当時の政府が瓦工の派遣などを含む、技術指導をしたことを物語っているという



そして金堂の後ろには講堂跡がある



講堂の礎石も残っている







別な角度から見てみる













都々逸坊扇歌堂/石岡市指定文化財





市指定有形文化財 都々一坊扇歌堂(建造物)

所在地 石岡市府中五丁目1番  
指定年月日 昭和五十三年九月十一日

都々一坊扇歌は、文化元年(一八〇四)医者岡玄策の子として久慈郡磯部村(常陸太田市磯部)に生まれ、幼名を子之松、のちに福次郎と改めた。幼少の折、病により失明同様となったが、芸の道を志し、二〇歳のとき江戸に出て、船遊亭扇橋の弟子となった。その後、寄席芸人としての修業が続き、天保九年(一八三八)一枚看板をゆるされ、当時流行していた「よしこの節」「いたこ節」などを工夫して、新しく「都々逸節」を作り都々一坊扇歌と名のつた。

扇歌は、高座にあって聴衆からのナゾかけを即座に解いてしまう頭の回転の早さが、江戸庶民の評判になったというが、当時の政治家や社会を批判したため、江戸追放の身となった。その発端となったのは「上は金 下は杭なし吾妻橋」の一句であった。

江戸を追放された扇歌は、姉の嫁ぎ先府中香丸町の酒井長五郎の旅宿に身を寄せ嘉永五年(一八五二)四十八歳で没した。

昭和八年、都々一坊扇歌を記念し、町内有志の呼びかけにより扇歌堂が建立された。



都々一坊扇歌木像



都々一坊扇歌浮世絵  
(国説石岡市史から)

## 扇歌堂の由来

初代都々一坊扇歌の壺を祀り  
永く顕彰するために昭和六年  
市内有志が建立期成会を結成し  
全国の芸能人及び都々一愛好者  
俚謡作家より浄財を集め昭和  
八年四月八日完成。盛大に入佛式が  
行なわれました。其の後昭和十六年  
十月扇歌百年祭を催し都々一を  
謡って手向け供養を致しました。  
堂内には、当時笠間在住の  
横山一雅氏の刻まれた都々一  
坊扇歌の木像が安置されてあります。

昭和辛巳年四月八日

石岡都々一保存会





これが現在の国分寺本堂/昭和五十二年の発掘調査により、この本堂西側(左手)に鐘楼基壇が発見されたという









変わったデザインの礎石



本堂右側面



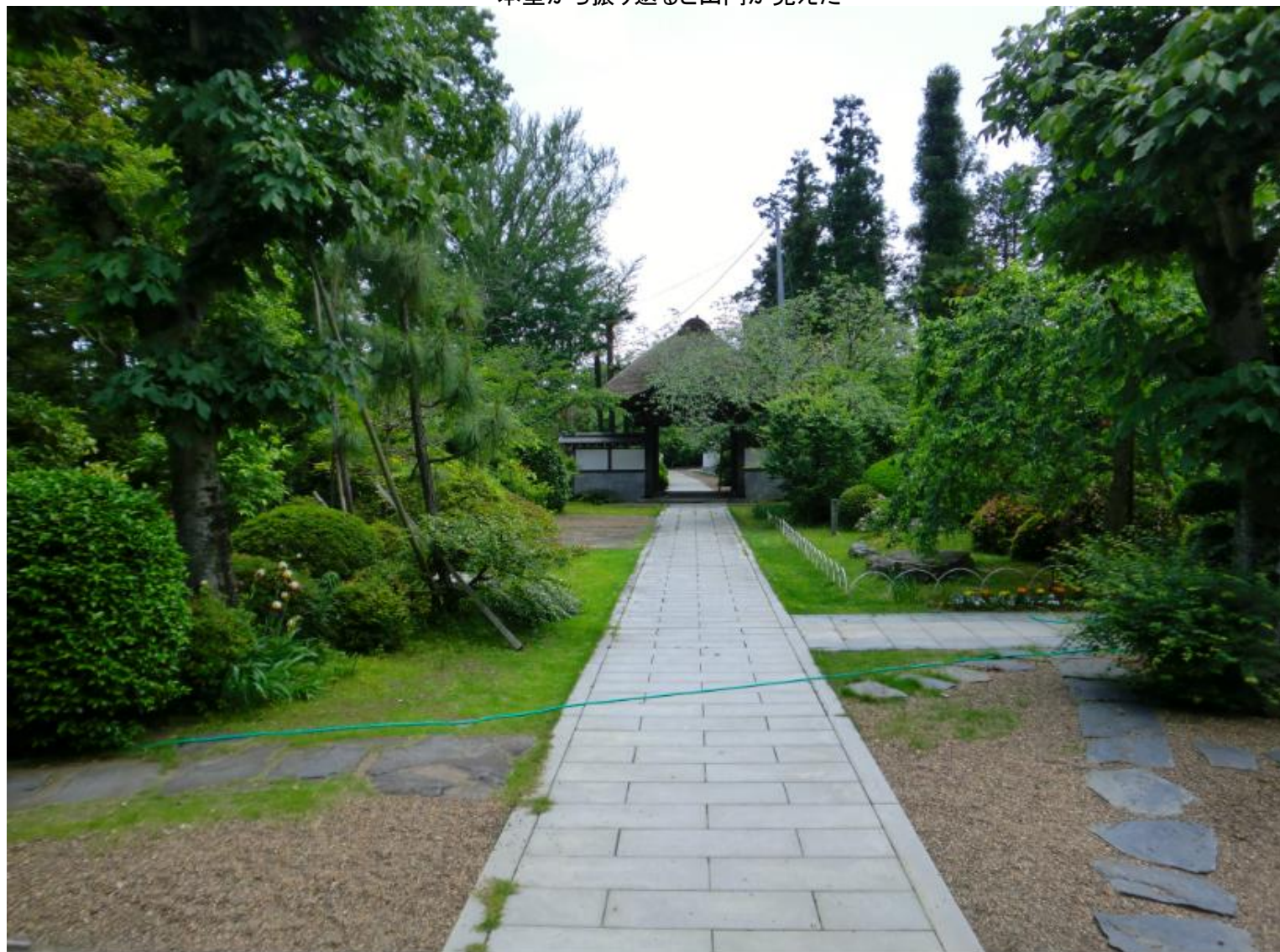


標柱に「阿波青石」とある





本堂から振り返ると山門が見えた







こちらが正面/その先に本堂が見える



石岡市指定文化財となっている





市指定  
有形文化財

# 旧千手院山門(建造物)

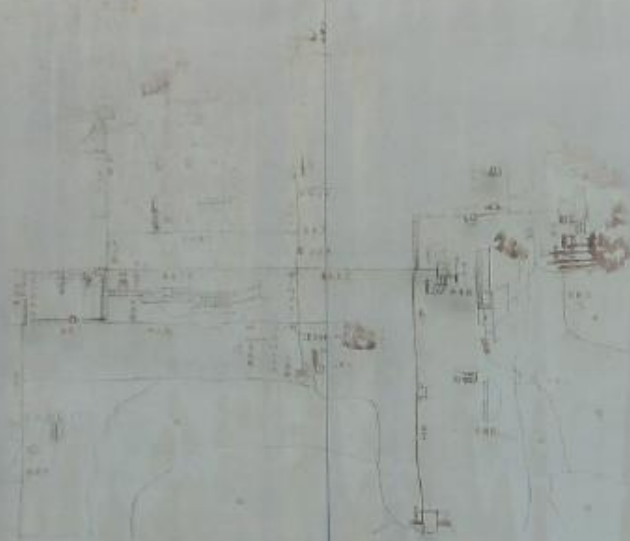
所在地 石岡市府中五丁目一巻

指定年月日 昭和五十三年九月十一日

千手院は、弘仁九年(八一八)、行基大僧正の弟子行円上人によりて開基され、建長四年(一二五三)の第一一世心宥上人が没するまで続いたと伝えられる。その後の記録は残されず、天正元年(一五七三)には、京都東寺宝善菩提院の禅我大僧正の弟子朝賀上人によって中興されたといわれる。河世の千手院は、府中における大寺のひとつで、『新編常陸国誌』にも千手院、本寺東寺宝善菩提院、朱印地十石、菩提院末寺二ヶ寺門徒二十一ヶ寺、又門徒二ヶ寺と号す。末寺二ヶ寺門徒二十一ヶ寺、又門徒二ヶ寺ありと記されている。

これら千手院末の寺院は、その大部分が府中の町にあり、人々の信仰を集めたが、明治初年にはそのほとんどが廃寺となっている。

また、千手院も大正八年(一九一九)三月、国分寺と合併して廃寺となり、現在ではこの山門が残るのみである。



府中町絵図

昭和六十年三月

石岡市教育委員会  
石岡市文化財保護審議会

大正時代にこの国分寺へと移築された、千手院の山門(千手院が再興された、天正元年(1573年)の頃に建てられたものという)











さて、これは七重塔の心礎とみられる巨大な礎石





この七重塔の心礎は、この国分寺の東の国分町台地東端の伽藍御堂とよばれる地区の道路工事に伴って発見され、ここへ移されたという



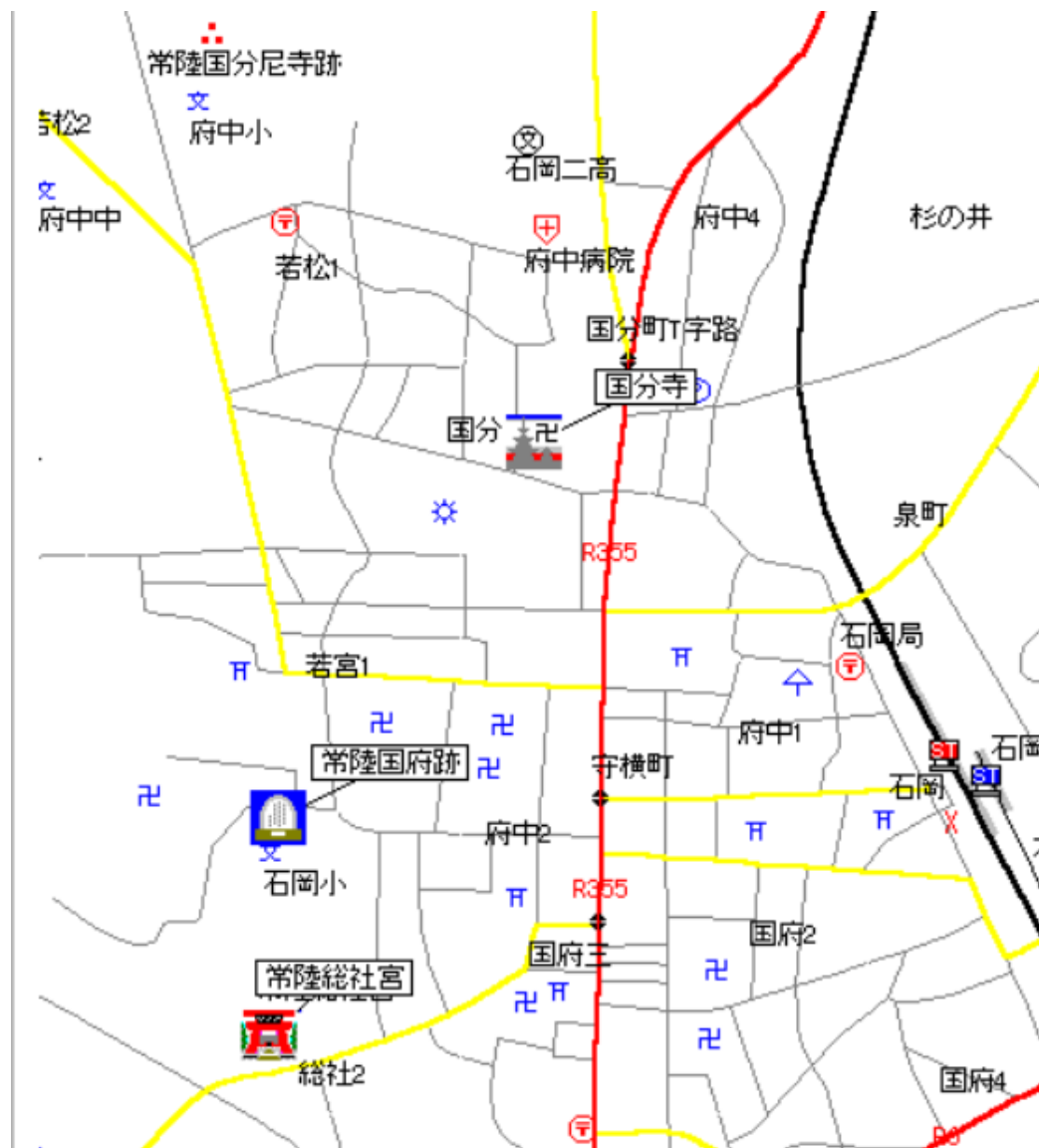
向こうは庫裏らしい/右手は本堂



RC造である







## 参考ホームページ

<http://www.rekishinosato.com/kokubunnii.htm>

<http://www.city.ishioka.lg.jp/index.php?oid=392&dtype=1000&pid=234>

<http://orange.zero.jp/kkubota.bird/hitachi.htm>

<http://ibatabi.dayuh.net/ishioka/kokubun.html>

<http://www.kasumigaura.net/usr/mizukusa/Kasumigaura/page/A0746.html>

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~ogm/siseki/rsfile1/s001.htm>

<http://kankodori.net/japaneseculture/site/009/index.html>